

ゼ0.2 mg/kgの投与を開始し、4日後には尿酸1.0 mg/dl以下および腎機能障害・高カリウム血症の改善を認めた。また、中リスクに分類された悪性リンパ腫(症例#3)では、ラスブリカーゼ投与にて、血中尿酸の分解を認め、血中および尿中尿酸の低下が確認された。安全性に関する検討では、症例#2において、ラスブリカーゼ投与4日目より肝逸脱酵素の上昇を認め、強力ミノファーゲン80 ml連日投与にて、18日目には肝逸脱酵素の改善を認めた。

TLSに対して早期より適切にリスク評価を行い、ラスブリカーゼを使用することによってTLS合併の発症を軽減することが可能と思われる。抗腫瘍効果の高い分子標的薬の登場によって、今後固形腫瘍の治療でもTLSを発症する可能性があり、注意が必要である。

#### P3-44.

#### 慢性閉塞性肺疾患における肺過膨張と心室拡張障害に血清アディポネクチン濃度は関連するか

(社会人大学院3年内科学第一)

○添田 聖子

(内科学第一)

瀬戸口靖弘、河野 雄太、富樫 佑基

【背景】慢性閉塞性肺疾患(以下COPD)はタバコ煙を主とする有害物質を長期に吸入暴露することで生じた肺の炎症性疾患であり、気流制限を特徴とする。一方、アディポネクチン(Adipo)血中濃度は内臓脂肪量と有意な逆相関を示し、内臓脂肪量を推定するバイオマーカーとなり、抗炎症効果など多岐にわたり疾患との関連性が報告されている。COPDにおける体重減少や心血管疾患などの併存症は独立した予後不良因子であるが、日本におけるCOPD患者の約70%に体重減少がみられ、欧米に比べて栄養障害の頻度が高いといわれており、呼吸不全の進行や死亡のリスクが高いことが問題となっている。また、COPDでは心臓の拡張障害性心不全が問題となっている。このような知見を基にCOPD患者の血清Adipoと呼吸機能検査、心エコー検査から得られる呼吸循環系の生理学的パラメータの関連性を評価した。【方法】COPDと診断した57人(GOLD I-III)を登録、Informed Consent後、採血、呼吸機能検査、心エコー検査を実施した。血清Adipo濃度

は、ELISA kit (Quantikine® R&D systems co)を用いて測定した。【結果と考察】血清AdipoはVC(肺活量)と負の相関を示した。心エコーでは、拡張不全の指標のひとつであるe/Eが10以上の群で血清Adipoが上昇する傾向を示した。COPDの気流閉塞が強くなれば残気量の増加に由来する肺過膨張とVCの低下につながり、呼吸に対するエネルギー消費量の増大、心臓に対する拡張障害をきたす。AdipoR、Adipo遺伝子改変マウスを使った報告からAdipoが心臓へ保護的に作用すること、肺形成あるいは肺保護的に作用することが示唆されており、今回の血清Adipoの上昇は、肺過膨張に由来する心臓拡張障害に対して代償的に上昇したと考えられる。【結語】血清AdipoはCOPDの過膨張と心拡張障害のサロゲートマーカーとなり得ることが期待された。

#### P3-45.

#### HCV関連慢性肝疾患における血清microRNAの検討

(内科学第四)

○今井 康晴、佐野 隆友、村嶋 英学

平良 淳一、杉本 勝俊、山田 幸太

古市 好宏、中村 郁夫、森安 史典

(医学総合研究所)

大槻 和重、大屋敷純子

【目的】HCV関連慢性肝疾患症例における血清microRNAを網羅的に解析し、臨床データとの関連性について明らかにする。【方法】対象は、HCV関連慢性肝疾患症例52例とControl(CO)群20例である。HCV関連慢性肝疾患症例の内訳は、肝腫瘍を認めない慢性肝炎(CH群)20例、肝腫瘍を認めない肝硬変(LC群)11例、乏血性肝腫瘍合併例10例(Hypo群)、多血性肝細胞癌合併例(HCC群)11例であった。肝硬変の診断は旧厚生省非A非B型肝炎研究班からの肝硬変判別式を用いて行い、52例中26例が肝硬変と判定された。血清microRNAはTaqman array miRNA card Aを用いて網羅的解析を行い、抽出された個々のmicroRNAについてQ-PCR法で定量した。【成績】(1)血清microRNAの網羅的解析によりHCV関連慢性肝疾患に特異的と思われるmiR-122、210、34a、320、21を抽出した。今回、

特に CO 群と比べて CH 群において著しく発現量が多かった miR-122 について以下を検討した。(2) 各群の血清 miR-122 平均値は、CO 群 0.948、CH 群 6.547、LC 群 1.950、Hypo 群 2.599、HCC 群 1.859 で、CH 群が他の 4 群に比して有意に高値であった。(3) 血清 miR-122 と臨床血液データとの相関は、アルブミン、ヒアルロン酸、血小板と相関を示し、HCV-RNA 量、ALT、総ビリルビン、 $\alpha$ -fetoprotein、PIVKA-II とは相関していなかった。【結語】HCV 関連慢性肝疾患において特異的と思われる microRNA がいくつか存在し、特に血清 miR-122 は慢性肝疾患の進行、線維化の程度に応じて低下していた。本研究は文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の助成による。

### P3-46.

#### Wire-guided cannulation による選択的胆管挿管法の有用性と安全性の検討

(内科学第四)

○田中 麗奈、糸井 隆夫、祖父尼 淳  
糸川 文英、栗原 俊夫、土屋 貴愛  
辻 修二郎、石井健太郎、池内 信人  
梅田 純子、殿塚 亮祐、森安 史典

【背景】内視鏡的逆行性胆管膵管造影 (ERCP) およびその関連手技は安全かつ確実に施行可能となってきた。しかしながら ERCP 後膵炎は依然数%の発症率があり、時に重篤な転帰をとることがある。近年 Wire-guided cannulation (WGC) による胆管挿管法が行われ、WGC は膵炎発症の危険因子である膵管造影の回避、手技時間の短縮による乳頭への負荷軽減および胆管挿管率の向上につながる事が報告されている。今回われわれは、選択的胆管挿管における WGC の有用性と安全性を検討した。【対象と方法】2009 年 6 月から 2010 年 12 月までに当院における初回 ERCP 症例のうち WGC を行った 169 例 (胆管結石 98 例、胆管癌 20 例、膵癌 15 例、胆嚢癌 6 例、急性胆嚢炎 8 例、他 22 例) を対象とした。方法はカテーテルにガイドワイヤー (GW) を装填した状態で乳頭開口部にアプローチし、GW を胆管軸にあわせて挿入し胆管内深部挿管を試みた。当科では WGC のみの深部挿管にこだわらず、早期から膵管 GW 法 (doubleWGC) を行っている。以上の

挿管法による手技成功率および膵炎発症率を検討した。【結果】WGC のみにて胆管挿管し得たものは 110/169 例 (65.1%) で、さらに膵管 GW 法 34 例、造影法 18 例、pancreatic sphincter precut 5 例、needle knife precut 2 例を追加することにより最終的に 169 例中全例で胆管挿管に成功した。膵炎は WGC にて 2 例、膵管 GW 法 2 例、プレカット 1 例で認めたがいずれも軽症であった。【結語】WGC のみでの挿管率は必ずしも良好とはいえないが、早期から積極的に膵管 GW 法等を追加することにより極めて良好な挿管率が得られる。WGC を主体とする膵管造影を行わない挿管法は膵炎発症のリスクを軽減できる可能性が示唆された。

### P3-47.

#### 胆膵悪性腫瘍における p53 蛋白過剰発現と血清抗 p53 抗体陽性率の比較

(内科学第四)

○梅田 純子、糸井 隆夫、祖父尼 淳  
糸川 文英、土屋 貴愛、栗原 俊夫  
辻 修二郎、石井健太郎、池内 信人  
田中 麗奈、殿塚 亮祐、森安 史典  
(病理診断部)  
大城 久、長尾 俊孝

【はじめに】近年における CT、MRI、EUS など画像診断能の発展は、小膵癌などこれまで発見困難とされていた予後不良である胆膵領域の悪性腫瘍の発見率向上に寄与している。しかしながら、造影剤による偶発症や EUS のように術者の能力で診断能にばらつきが存在するなどの問題点があり、より低侵襲で簡便なスクリーニング検査が望まれる。一方、血液検査における血清抗 p53 抗体は食道癌、大腸癌、乳癌において早期癌での高い陽性率が報告されている。今回、胆膵領域の悪性腫瘍に対する血清抗 p53 抗体の陽性率と組織検体における p53 蛋白過剰発現の割合を比較検討した。

【方法】これまでに経験した胆膵疾患連続 45 例 (膵癌 33 例、胆管癌 6 例、胆嚢癌 4 例、胆管細胞癌 2 例)、コントロールとして慢性膵炎 7 例、急性膵炎 2 例、総胆管結石 13 例に対し血清抗 p53 抗体の測定を行った。必要検体量は血清 0.3 ml、検査方法は ELISA 法、基準値は 1.30 U/ml 以下を陰性とした。全例、加療